帰命と願生

西坂孝介

衆生に発起する一心の内実を、『浄土論註』を中心にして「帰命」と「願生」という視点で考察する。

曇鸞は、「帰命」を了解する時、それを礼拝に関係して確認する。一般に礼拝は、その行為の有無で成立すると了解されるが、「礼拝は但是れ恭敬なり、必ず帰命にあらず」と訓む親鸞の背景を考えるならば、礼拝に宗教的行為として絶対的価値や権威的付与をしても帰命とは本質的に相違することをここでは指摘していると思われる。それは、帰命という内容の確認を抜きにした礼拝のもつ質そのものへの問題提起である。何故なら、我々は何か自己と対照的に仏を立て、それに礼拝する事で帰命が成り立つと考える。しかし、自己と対象化して礼拝という行為が成立する限り、それは自己願望の満足を要求する事でしかないであろう。では、何故相対的対象への礼拝では帰命にならないのか。一体、衆生にとって如何なることが帰命といえるのか。その事は「十方諸仏を礼拝する」在り方に対し、「阿弥陀如来を礼拝する」身の決定にその課題があると考える。しかし、何故それが帰命を確認することと言えるのか。私は、一心の自覚内容としての帰命の内実は、自己存在の自覚を通して自己救済の依拠を「浄土」という方向性の決定で成立すると考える。つまり、自己における仏道への関わり方が、「十方諸仏」という在り方から「阿弥陀仏」という選びに決着したことに重要な意味があると思う。それは、単に諸仏と阿弥陀仏の優劣の相違を相対的に論証して問題にしたのではなく、その事に関わる「我が身」の主体的存在事実が明確になるという課題が背景にあると思われるからである。つまり、十方諸仏の礼拝という在り方は、確かに仏道において修道の在り方の一つとして重要な意味を持っている。しかし問題は、その行為そのものの優劣ではなく、それに関わる自己が已に自明化され、それを前提として行為に重点をおこうとする自己の意識が問題なのではなかろうか。それ故に、十方諸仏への礼拝が、「必ず願生の意あらず」と指摘される様に、自己を自明化して仏道に関わる在り方の根底には、無意識に我が身への執着があることをここでは問題にしていると思われる。しかしそれは何故か。我々は、これまで培ってきた自己の経験・知識等で自己の価値観をもち、それを絶対化しては自負しようとする心が根底にあるからではなかろうか。それ故に、そこに止まる限り、そのことが自分を束縛していくことになると思われる。しかしその確認する内容が何故願生であるのか。

曇鸞はその内容を、二つの問答を立てて考察する。すなわち願生の「生」についてと「往生」の了解である。

仏教では、衆生は本来「無生」にして「因縁生」を生きる存在と教説するが、現実は自我に執着し自己の生を実体的に認識している。しかしながら、本来衆生は如何なる存在なのかという事を、「穢土と浄土」「衆生と如来」が「不一不異」の関係で成立するところでその関係性が相対的な事でないこととして押さえる。この事は、単なる理論的説明ではなく、事柄の両方を同時に開顕する事で双方の事柄を同時に明確にしていると思われる。その事は具体的に、「前念後念」としての信心の内容において確認される事であるが、その事実に目覚めて生きる仏道全体が、衆生におい

て浄土に往生するという歩みとして教示されてくるのではなかろうか。では、そのことによって、衆生に如何なる事が明らかになるのか。その確認を、「尽十方無碍光如来」の内容として押さえる。

世親は、阿弥陀仏を「尽十方無碍光如来」と頷き、その具体性を「称名」と了解した。親鸞においては「称」を「知軽重也。説文曰鈴也是也等也俗作秤云正斤両也」と押さえ、その内容をはたらきと見る。そのことを背景に考えると、名号は法の具体的表現としての意味と了解できる。しかし、曇鸞はそこに一つの疑問をなげかけ、その具体的内容を、「三種不相応」（「三不信」）、つまり信心不相続という信心のもつ質の問題提起として押さえる。

このことを踏まえて思うに、仏を自我範疇に取り込む限り、その根底には仏を「私が信じる」と言うように、「私」を自明化して相対的に仏を立てる事にしかならないのであるが、その事は逆に教えに背反している自己として明確に教示されていると思われる。つまり、信心不相続は、自己に対する不安と仏智疑惑が背景に潜んでいると思われるが、その身の事実が同時に仏を信知すると共に、曇鸞はその頷きを通して「碍は衆生にあり」という事実を証知した。それは、自我を前提にすれば法は相対的理論に過ぎず、その事が仏法を私有化し、それによって法を「信じる・信じない」という自己救済の為に条件化する自己の在り方を明確にしていると思う。何故なら、阿弥陀仏を「称彼如来名如彼如来光明智相如彼名義欲如実修行相応」と了解したことは、自我意識との訣別を意味していると思われるが、その具体性は「称」と「依」との関係に問題性を見出せるし、具体的には、念仏に帰依しながらも曇鸞に起こった「然有称名憶念而無明由不満所願者何者」にその課題を読み取れる。つまり、「称」を法の具現的表現（はたらき）と押さえられるならば、その「称」が人間の関心事に取り込まれた行為性であると了解する限り、それは自己救済の為に手段化し目的として、質が変わるのではなかろうか。しかし、何故そうなのか。その背景にあるのは、自我とは自己と相対的実体的な事ではなく、この私の存在事実であり、その具体性を名号において我々に表現（回向）された事実として確認したのである。ただ、その事は何故衆生の課題として確認されなければならないのか。それは同時に、如来は何故本願を発起したかに関わって了解されていく。その内容は、後の観察以降の本願発起における浄土建立の意義で確認される。すなわち、因位の本願発起と成就の確認であり、その根柢に「不虚作住持」における本願力の住持がある。それが「回向為首得成就大悲心故」といわれるように、真実信心は本願力に住持された大悲心の表現として了解できると思う。その内実が衆生においては、一心帰命し願生する信心の成就であるが、しかしながら、では何故それが阿弥陀仏であり、何故本願なのか、また浄土なのかという課題全体が問題として残ると思う。この事については用紙の関係上別紙にて考察することに譲ることにする。